

皇學館大学
ボランティアルーム

令和6年度 活動報告書



目次

指導教員挨拶	1
代表学生挨拶.....	3
1.コーディネート報告	
令和6年度ボランティアコーディネート活動報告	7
2.ボランティアルーム企画・活動	
募金企画 活動報告.....	13
ちょこっと福祉 活動報告.....	16
倉田山清掃 活動報告	18
サマースクール 活動報告.....	21
他大学交流 活動報告	24
倉陵祭 活動報告	26
季刊誌 活動報告	28
3.アンケート報告	
アンケート報告.....	33
4.資料	
令和6年度ボランティアルーム学生スタッフ一覧	43

報・連・相、そして顔

ボランティアルーム担当教員

教育学部 叶 俊文

令和6年度皇學館大学ボランティアルームの活動も終了することになる。今年度はどのような活動ができて、どのような反省をすることになるのだろうか。

新型コロナウイルスの蔓延から時間が経ち、活動も通常通りの内容に戻ってきている。の中でボランティアルームの活動は停滞しているような気がする。コロナ前の活動をそのまま行なっているということが言える気がする。それよりもコロナ前の活動よりも活気がなくなっているのではないだろうかと感じている。学生スタッフの数は増えている。正確ではないが、50名近い学生が関わっているようだが、その顔が見えない。誰がどんな活動を進めているのか。それが見えてこない。これは活動を停滞させる要因にはなっていないのだろうか。

見えてこない要因にはどんなことがあるのか。年間報告会において出てくるのは、「連絡がうまくいかず」であったり、「話し合いがうまくできず」であったり、「相談ができず」というような反省であった。このような反省を社会福祉協議会の方々の前で発表するという事は、本来なら恥じるべきことである。それを躊躇なく発表していることに疑問さえも感じたぐらいである。何故こうしたことが起きるのか。それぞれの担当班の話し合いはどのように進められているのだろうか。LINEを使っての夜のミーティング、meetを使っての夜のミーティング、それにも参加できない状況などがあったのではないだろうか。LINEやmeetはいつでもできるという利点はある。あるいは学生のできる時間を探しながら開催することもできる。しかし、そこに顔は見えない。

こうした顔の見えない「話し合い」で本当の話し合いができるのだろうか。お互いが顔を合わせながら話をするから、報告もできるだろう、連絡もできるだろう、相談もできるのではないだろうか。それは報告することによって、相手の顔が頷いていることを確認できる。連絡している時も連絡内容を噛み締めていることが確認できる。相談するときは、相互の顔と顔がぶつかるから、さまざまな意見が交換されるように思う。

最近のリーダーミーティングも夜のmeetになっている。数年前は私の研究室で昼休みを利用して、短時間ではあるけれどもお互いの顔と顔を突き合わせながら、「ああだ、こうだ」と話し合いをしていた。それが意見交換というもののように思う。その点では、再度ミーティングがどうあるべきかを考える時期に来ていると考えてしまう。安易にオンラインでの参加を認めることが全体ミーティングの参加を低くしているようにも思う。みんなで教室に集まってきて、顔と顔を合わせて話し合いをしてみようだろうか。もちろん、担当者同士の話し合いも集まって話す必要があると考えている。それ面倒くさいことではなく、積極的な意見交換をするためである。

楽を求めるのではなく、本当にボランティアルームをより良くし、自分たちの活動に責任を持っていくのであれば、顔と顔を合わせながらしっかり話し合いをしていこう。それが報告、連絡、相談を意味のあるものにしていく要因になると思う。最後の提言になると思うが、来年度の年間報告会で恥ずかしいような発表にならないためにも、大事なことは何かを考え欲しいと感じている。来年度の皇學館大学ボランティアルームの学生スタッフに期待している。

向上の年

皇學館大学ボランティアルーム 学生スタッフ
文学部コミュニケーション学科
4年 竹内 七菜実

令和2年に流行した新型コロナウイルス感染症による活動制限が緩和され、地域の自治体や団体が主催するイベントの開催が増えたことで、ボランティア依頼が大幅に増加した。昨年度は、ボランティアの依頼件数が急増したことにより、スタッフ間の連絡漏れや提出書類の不備が見られた。そこで、今年度はボランティアルームを運営していくスタッフとしての力をつけることを指針とし成長した1年となった。

昨年度から仕事量が増えたにもかかわらず、日々の活動を行える学生スタッフが十分ではなかったため、一人の業務量が増え、時間が足りず引継ぎが十分に行えなかった、引継ぎノートに記入漏れが見られたため期限ギリギリで書類を提出するといった行動が目立っていた。スタッフ間でもどうすれば報連相がしっかりできた運営を行うことができるのかを話し合い、今年度では引継ぎシートや参加者記入シートを導入し、新たな運営方法を行った。ボランティアルームでは、コマごとに活動を行うスタッフが変わるため、引継ぎが重要となってくる。そのため、今後もどのようにすればスムーズな運営を行っていかれるのかを考え、行動に移すことが大切であると考えた。

心残りがあるとするれば、令和6年1月1日に発生した能登半島地震への対応である。ボランティアルームでは募金活動を行ったが、それ以外の活動を実行に移すことができなかった。今後ボランティアルームは様々な状況の中で何をすべきか考え、すぐに行動していく力をつけることができればより明るい未来へ導くことができるだろう。報連相の徹底といった課題や学校生活の中でボランティアの魅力一般学生に発信していくなど頑張りが必要になる場面も多いが、コロナ鍋を乗り越えてきた彼らなら問題ないだろう。一人一人が築き上げた経験はボランティアルームにとって大きな力となり、次のステージへと力強い一歩を踏み出す原動力となっていく。

最後になりましたが、ボランティア関係者の皆様には、このような機会をいただきましたことに心より感謝申し上げます。今後とも変わらぬご支援とご協力をよろしくお願いいたします。

1. コーディネート報告

令和6年度 コーディネート報告

1. 目的

皇學館大学ボランティアルームでは、ボランティア活動を求めている学生の支援を目的として活動している。ボランティアルームに所属する学生スタッフが、ボランティアを求める学生に対してボランティアをコーディネートすることを中心に考え、活動を行なっている。そこで、ボランティアのコーディネートについて今年度の活動を報告する。

2. コーディネートの活動内容

学生スタッフの仕事の一つであるボランティアコーディネーターとしての活動は、三重県内の社会福祉協議会や地域の自治体などから依頼されるボランティアを受け付け、学生にボランティアを提供することである。学生にボランティア情報を提供することで、地域と学生をつなぐ役割を担っている。

学生へのボランティアの情報提供として、2号館1階ボランティアルーム横と6号館1階の掲示板、LINE、Instagram（インスタグラム）、X（エックス）での発信を行ってきた。

SNS での情報発信では、Instagram のストーリー機能を用いてボランティア募集状況や開室時間を発信することで手軽に情報をチェックできるよう情報発信に力を入れ、学生への参加促進を図った。

ボランティアコーディネートを学生スタッフが行うことにより、気軽にボランティアに参加することができるため、学生のボランティア参加をより促すことができると考える。

しかし、学生スタッフがボランティアコーディネートをを行うにあたり留意点がある。それは、地域と学生の関係を対等かつお互いに成長できる関係へ調整をすることである。図1のようなつなぐ役割を円滑にコーディネートを行っていくために、ボランティア依頼先や参加学生と連絡を取り合うことや、大学とボランティアルーム間の事務処理を学生スタッフ一人ひとりが責任やコーディネーターとしての意識を持ち、活動に取り組んでいく必要がある。



図1 ボランティアルームの仕組み

3. コーディネートの状況

今年度のボランティアを依頼されたボランティア情報件数は、82件（随時ボランティア含む）であり、コーディネート件数は32件であった。コーディネート人数はのべ147人になる。コーディネートは昨年度よりもボランティア件数、コーディネート件数、コーディネート人数すべて下回る結果となった。

内訳は以下の通りである。

	ボランティア総件数	コーディネート件数	コーディネート人数
令和6年度	82件	32件	147人
令和5年度	101件	48件	228人
令和4年度	53件	30件	198人

ボランティアルームでは以下のように依頼されたボランティアを3つの種類に分類し、情報を発信している。（随時ボランティアを除く）

- ①子どもサポート：子どもを対象としたイベントのスタッフ、特別支援学級活動、託児補助等
- ②地域援助：地域イベント、コンサートスタッフなど
- ③福祉系：障がい者（児）福祉競技スタッフ、福祉施設イベントスタッフなど

3つの種類のボランティアの情報件数は次の通りである。

	ボランティア件数	コーディネート件数	参加人数
子どもサポート	16件	6件	61人
地域援助	40件	18件	53人
福祉系	11件	5件	19人

昨年度と比較して、子どもボランティアが12件減、地域ボランティアが8件増、福祉ボランティアが8件減、随時ボランティアが7件減という結果となった。子どもボランティアのボランティア件数は減少したものの、まなびばや宿題お助けボランティアなど毎年参加人数が多いボランティアがあるため参加人数は昨年度より10人減と多く変わった様子は見られなかった。地域ボランティアでは、ボランティア件数は増加し、コーディネート件数は1件減だが、参加人数が50人減と約半分ほどの結果となった。夏季長期休暇前のボランティアの参加者が例年よりも少なかったことが原因の一つと考えられる。休暇前に広報活動に力を入れる等の活動も視野に入れると参加者の増加につながると思う。

前年度までのボランティア依頼件数とコーディネート率を比較すると図2の通りである。

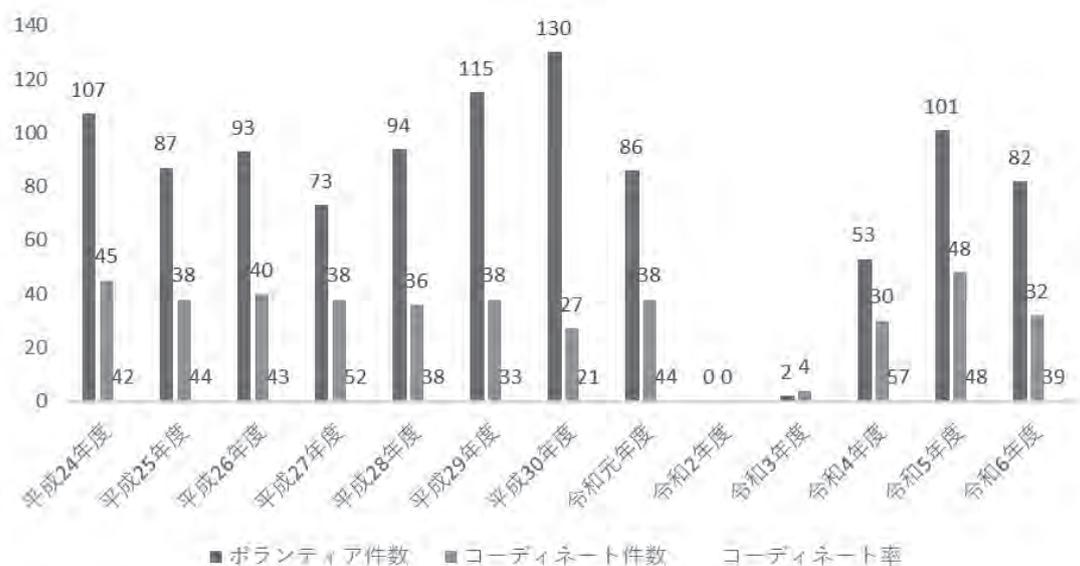


図2 各年度ボランティア件数

昨年度よりもボランティア件数は下回る形となったが、新型コロナウイルス流行前と引けを取らない数値にまで回復してきた。しかし、今年度のコーディネーター率は40%を切る形となった。参加者0人で依頼者に返答をしたボランティアが多く、参加者がいないという状態が続くと皇學館大学ボランティアルームから参加者を募ることは難しいというイメージがついてしまう可能性がある。このようなイメージを与えないためにも、参加者を集められる募集方法の見直し、学生に向けての積極的な声かけ、学生スタッフの積極的な参加などアプローチの改善や、新たなアプローチを行っていかなければならない。

4. ボランティア登録学生についての詳細

ボランティア登録学生からみると、今年度の公式LINEの登録者数は372人、Instagramのフォロワーは426人、Xのフォロワーは611人であった。

公式LINEでは、昨年度に引き続き学内での掲示やInstagramでの広報活動を行った。しかし、ボランティア情報の一斉送信を試みたが、公式LINEの送信数の制限が登録者を下回っているため、一斉送信を行うことができず、SNSでの呼びかけはInstagramのみとなった。

ボランティアルームの認知を高めるため、昨年度と同様に各学年のガイダンス時に、ボランティアの参加が見込める1~3学年のガイダンス内でボランティア参加の呼びかけを行った。また、新入生歓迎会に参加し、新入生に向けてボランティア参加や学生スタッフの加入について呼びかけを行った。ボランティアルームの認知という点ではガイダンス・新入生歓迎会での広報活動は十分な効果であるため、今後も続けていきたい。しかし、ボランティアの魅力や楽しさを伝えるにはこれらの活動では伝えきることが難しい。今後さらなる発展をしていくには、公式LINEでの呼びかけを工夫したり、参加したボランティア

の感想や魅力の発信、Instagram ではより学生の目に留まりやすいようなボランティアの紹介をしていくなどの努力が必要になってくるだろう。

5. 今年度のボランティアルームとしての活動

前年度では学生に向けてのボランティア情報発信の向上、学生スタッフ間での的確な情報伝達、提出書類の不備等ミス解消を図る業務の効率化を課題とした。これらの課題を踏まえ、今年度では、新たにボランティア手続き確認シートを導入した。ボランティア手続き確認シートとは、ボランティア募集～締切までの各行動を項目別に記し、業務を行ったスタッフの名前・日付を書くことで、進捗具合が一目で理解することができる。従来の業務の伝達方法は、ノートに日付を書き、その下にその日行った仕事内容を書くものであった。そのため、毎回ノートを遡り進捗状況を確認していたが、ボランティア手続き確認シートを導入したことにより、その手間を省くことができた。導入後、ボランティアの手続き状況の把握が行いやすくなり、スタッフの活動の取り掛かりも行きやすくなった。しかし、手続き確認シートの記入忘れが見られるため、ノートの記入と手続きシートを併用しつつ、新たなルールを導入するなどより的確な情報伝達ができるようにしていきたい。

今後、ボランティアルームを発展していくにあたって、昨年度から行っている業務の効率化に伴った業務の変更点や、ボランティア手続き確認シートといった新たな方法を取り入れた業務のマニュアル化を行って行くことで、新たなスタッフがより早く活動に参加できるようになるだろう。

また、コーディネーター件数を継続して増やしていくためには、学生スタッフ全員の積極的なボランティアの参加が必要になってくるだろう。ボランティアルームの本来の役割であるボランティアを求める方々とボランティアに参加したい学生をつなげるためには、スタッフ一人ひとりの行動力が必要になってくる。コーディネーターを行って行くことも大事であるが、数字を挙げることにとらわれず、ボランティアの楽しさや魅力を伝え、ボランティアを身近に感じてもらう本来のボランティアルームの形を忘れずに活動を行っていかなくてはならない。学生スタッフが多くのボランティアに参加し、経験を積んでいくことは自分の為にもなり、スタッフとしてボランティアに参加する学生のサポートを行うなどボランティアの良さを伝えることができる。私たちのボランティアへの想いがいつか大きな花を咲かせられるように、スタッフ一同改めてボランティアと向き合っていきたい。

【文責：文学部コミュニケーション学科4年 竹内 七菜実】

2. ボランティアルーム企画・活動

令和6年度 学内募金活動 活動報告

〈能登半島地震募金活動〉

1. 目的

令和6年1月1日に能登半島を震源とする強い地震が発生した。この状況を受け、ボランティアルームは生活必需品の提供、医療支援、避難所の運営、生活再建のための支援を行う日本赤十字社に寄付し、被災した人々の支援を行うことを決めた。また、大学内での募金を呼び掛けることで、学生がボランティアルームやボランティア活動に興味を持ち、手軽に参加するきっかけにしたいと考えた。

2. 活動内容

実施日：令和6年5月15日（水）、5月22日（水）

活動時間：12:40～13:30（昼休み）

活動場所：皇學館大学 倉陵会館1階ロビー

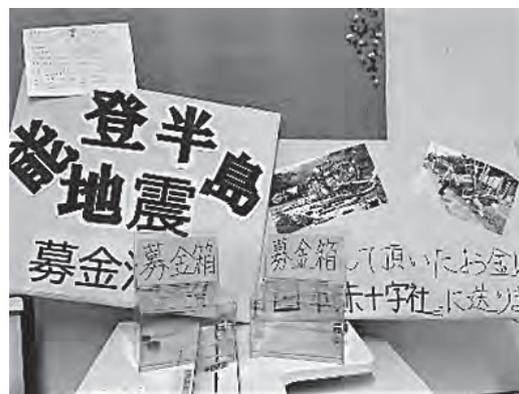
参加人数：ボランティアルームスタッフ11人

寄付先：日本赤十字社

内容：募金箱と看板を持ち、募金の呼びかけを行った。

3. 活動報告

事前にボランティアルームのInstagramで、募金活動の目的、日時、寄付先を掲載し、宣伝を行った。活動場所は、学生食堂内に設定することで、より多くの人が目につきやすい場所を設定した。現金の取り扱いは、募金箱を鍵で施錠し、ボランティアルームスタッフが手を持ちながら募金を行うことで、細心の注意を払った。活動に参加するボランティアルームスタッフが予定より多く集まったことにより、役割分担をしっかりと行い、呼びかけを行うことができた。活動後は、寄付金の集計作業を行い、2日間で7,672円集まった。集まった寄付金は日本赤十字社へ寄付をした。



4. 反省

評価できる点は、募金活動に参加するボランティアルームスタッフを多く募ることができ、より活気のある募金活動を行えた点である。また、SNSを活用して、募金活動の周知を行うことができた。

改善点は、募金開始が遅くなったことが課題である。しかし、能登をはじめとする被災地での復興作業が遅れていたことを考慮すれば、募金活動の意義は十分にあったと言える。今後の募金活動の内容については、災害等が起こった際にすぐに募金活動を開始できるように準備しておくことや、学生にとって身近に感じやすく理解しやすい内容の募金活動にしていくことが必要であると考えます。

〈能登半島大雨災害義援金（珠洲市）〉

1. 目的

令和6年1月1日に発生した地震に続き、令和6年9月21日～9月23日に大雨災害が発生し、能登を中心とする地域での地震からの復旧が進まない状況で、豪雨による被害が追い打ちをかける形となり、被災者の不安は大きくなった。そこで、もう一度能登への募金を行うことに決めた。

2. 活動内容

実施日：令和6年11月2日（土）、11月3日（日）

実施時間：10：00～16：00

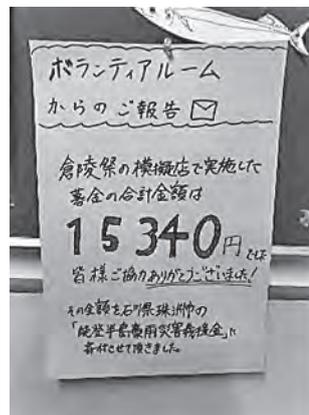
活動場所：皇學館大学芝生広場、倉陵祭ボランティアルーム模擬店内

寄付先：珠洲市（公式ホームページ経由）

内容：模擬店内に募金箱と看板を設置し、来場者に募金協力の呼びかけを行った。

3. 活動報告

倉陵祭の模擬店で活動を行うため、倉陵祭担当者と連携を取りながら準備を進めた。屋外での現金を取り扱いにおいては、設置した募金箱の近くに必ずスタッフがいるようにすることや、募金箱を必ず施錠した状態にしておくことにより安全性を確保した。2日間で計15,340円の募金が集まり、珠洲市の公式ホームページより寄付をした。



4. 反省

評価できる点は、寄付先を珠洲市に特定したことで、寄付金の使途が明確になった。1回目に行った「能登半島地震募金活動」では寄付先が広範囲に設定されており、寄付金がどの市や町に届くかは分からないという状態であった。その為、今回は地域を絞り、直接その市に寄付金が届くよう、寄付先を決定した。また、倉陵祭では大学生だけでなく、一般の方々も多く模擬店に来ていたので、ただ募金をするだけでなく、被災地について対話を行うことができ、募金活動を行うボランティアルームスタッフとして改めて募金活動を行う意義を考えることができた。

改善点は1回目と2回目の募金活動で活動内容が類似していたことである。しかし、地震、豪雨災害ともに支援を必要としていたため募金活動を行うことは必要であったと考える。今後の改善策として、多様な募金活動を行っていくことが必要だと考える。例を挙げると、食糧支援や赤い羽根共同募金等様々な企画が考えられる。募金活動の決定に当たっては、募金グループだけでなく、ボランティアルームミーティングを活用し、皆に意見を求めることが望まれる。

5. まとめ

令和6年度は「能登半島地震募金活動」と「能登半島大雨災害義援金（珠洲市）」の2つの募金活動を行った。「能登半島地震募金活動」では合計7,672円、「能登半島大雨災害義援金（珠洲市）」では15,340円の寄付金が集まった。

令和6年度の募金活動を通じて、多くの学生が被災地支援に関わる機会を持つことができた。今後も、災害が発生した際に迅速に対応し、効果的な募金活動を実施できるよう、組織としての体制を強化していくことが重要である。また、支援の形を多様化することで、募金活動に留まらず、より広範囲なボランティア活動へと展開していくことが求められる。

【文責：教育学部教育学科科 2年 松阪 美咲】

ちょこっと福祉 活動報告

1. 企画の目的

「ちょこっと福祉」企画は、例年、伊勢市社会福祉協議会との共催により、伊勢市内の小中学生を対象に「ちょこっと福祉体験」を行っている。今年度は、「冬のちょこっと福祉体験」として、装具を使用した高齢者擬似体験と、専用のゴーグルを使用した視覚障がい者の見え方の体験を行った。これらの体験活動は、高齢者や障がいのある人の身体状況を理解すること、その上で、自分たちにはどのようなサポートができるのかを考えるきっかけをつくることを目的として行っている。

2. 活動内容

〈冬のちょこっと福祉体験〉

- ・活動日時：令和7年2月9日(日) 10:00~12:00 (※積雪のため中止)
令和7年2月15日(土) 10:00~12:00
- ・活動場所：イオンタウン伊勢ララパーク内 げんこころ一む
- ・参加人数：子ども(小学生)15名程度、大人2名、学生スタッフ3名
- ・活動内容：高齢者擬似体験(装具を身につけて階段の上り下りなどを行う)
視覚障がい者の見え方体験(専用のゴーグルをつけて室内を歩く)

3. 活動報告

今年度は、事前に参加者を募集するのではなく、当日、イオンタウン伊勢ララパークの来場者に声かけをして体験に参加してもらった。対象年齢を設けなかったことで、幅広い世代の方に体験をしてもらうことができた。

1) 「高齢者擬似体験」

参加者は、大人1名であった。「高齢者擬似体験装具」を身につけて、ララパーク内の歩行や階段の上り下りを行った。膝や肘、腰の曲げにくさを体験し、年齢を重ねるにつれて体を動かしにくくなるということを実感していた様子だった。また、3名の学生スタッフも事前に「高齢者擬似体験」を行い、体の動かしにくさや移動の困難さを実感するとともに、適切な介助の方法を理解することができた。

2) 「視覚障がいのある人の見え方体験」

参加者は、子ども15名程度と大人2名であった。専用のゴーグルをつけて、視野狭窄、白内障、緑内障、全盲の見え方を体験した。参加した子どもたちからは「(緑内障の見え方は)緑に見える。」、「(視野が狭いから)横が見えない。」、「真っ暗で全然見えない。」という声があり、視覚障がいによる見えにくさを実感していた様子だった。また、大人の方からは「こんな見え方になるのか。勉強になった。」という声があり、将来なるかもしれない自分の姿を重ね合わせて、目が見えにくくなるということを実感していた様子だった。

〈活動の様子〉



4. 反省

今年度の活動を振り返って、一番の反省点は、当日の来場者に声かけをして体験に参加してもらおうという形で活動を行ったため、しっかりと時間を取って体験したり、自分たちができることについて考えたりしてもらうことができなかった点であると考えている。この方法は、買い物などのついでに気軽に福祉体験に参加することができるという利点がある一方で、装具やゴーグルをつけただけで終わってしまうことが多く、結果的に「活動あって学びなし」になってしまったと考える。また、参加した学生スタッフからは、「体験自体よりも、来場者への声掛けに集中してしまった」という意見もあり、活動の目的を達成できたとは言い難い結果になってしまった。

5. 今後の展望

これらの反省を踏まえ、来年度は例年通り事前に参加者を募集し、計画的に活動を行いたいと考える。そのために、社会福祉協議会との連絡を早めに・密に取ることと、参加者を募集する期間も考慮し、早期に活動内容を決定し準備を進めたい。

また、参加者の募集に関しては、今年度の活動報告を踏まえて、子どもたちだけでなく、大人も募集対象に入れることを検討したい。活動内容についても、体験して終わるのではなく、体験から「自分たちにできること」を考える機会が持てるような工夫を凝らしたい。

さらに、今年度は社会福祉協議会との打ち合わせや当日の活動開始前に、学生スタッフも高齢者疑似体験を行うことができた。この事前の体験によって、高齢者の体の動かしにくさや適切な介助の方法を理解し、学生スタッフがスムーズに活動に参加することができた。このことを生かして、来年度も可能な限り、事前に学生スタッフが体験をできるような機会を設けていきたい。

6. まとめ

来年度以降は、以上のことを踏まえ、この福祉体験をより充実したものにできるように、スタッフ間で協力して努めていきたい。

【文責：教育学部教育学科 2年 打田 桂花】

倉田山清掃 活動報告

1. 企画の目的

「倉田山清掃」は、学生スタッフや一般学生を対象にボランティアを募り、皇學館大学周辺の地域清掃を行う企画である。通学路として普段歩いている場所に落ちているゴミを拾い、ポイ捨てをしてはいけないという意識を高めるとともに、学生スタッフと一般学生の交流を深め、ボランティアルームの認知度の向上を図ることを目的としている。

2. 活動内容

【第1回倉田山清掃】

- ・開催予定日：令和6年5月19日(日)
- ・実施状況：雨天のため中止とした

【第2回倉田山清掃】

- ・開催日時：令和6年6月26日(水) ①13:30~15:00/②15:10~16:40
- ・清掃区域：①大学正門~旧伊勢消防署前/②大学正門~市立伊勢総合病院前
- ・参加者：①学生スタッフ3名、一般学生3名/②学生スタッフ8名

【第3回倉田山清掃】

- ・開催予定日：令和6年10月26日(土)
- ・実施状況：募集期間が短かったこともあり、参加者が集まらなかったため中止とした

【第4回倉田山清掃】

- ・開催日時：令和6年11月30日(土) 13:30~15:00
- ・清掃区域：大学正門~旧伊勢消防署前
- ・参加者：学生スタッフ7名

〈活動の様子〉



3. 活動報告

学生スタッフには LINE グループ内で、一般学生には学内掲示板や SNS 等でボランティアの募集を呼びかけた。

皇學館大学記念講堂前、またはボランティアルームに集合し、清掃区域の説明や写真撮影の許可取りをした後、各清掃区域のゴミ拾いを行った。どちらの清掃区域にも、歩道橋にタバコの吸い殻が多く捨てられており、車に乗っている人がポイ捨てしているのではないかと考えられる。また、草むらなどの見つかりにくい場所には、ペットボトルや食べ物の容器が捨てられていることが多く、中身が入っているものもあった。ゴミ拾いを終えた後、再び記念講堂前に集合し、活動に参加していただいたお礼を伝え、解散した。ゴミの分別や片付けは、主に、倉田山清掃企画に所属している学生スタッフが行った。

参加者は、ボランティアルームスタッフが多く、学部・学年の壁を越えて会話をしながら楽しく活動に取り組んでいた様子だった。特に、第2回倉田山清掃に参加した学生スタッフ8名の内、6名はボランティアルームに所属したばかりの1年生であったが、「倉田山清掃」への参加を通して、同学年の人たちや先輩との交流を深めることができていた様子だった。また、この結果から、春学期の「倉田山清掃」は、初めてボランティアに参加する学生でも参加しやすいボランティアであると気づくことができた。

4. 反省

- ・一般学生の参加者数が少なかった
- ・年度始めに立てた計画通りに活動を実施することができなかった
- ・片付けに時間を要し、活動終了予定時間を過ぎてしまうことがあった
- ・企画メンバー間での報告・連絡・相談が十分でなかった

5. 今後の展望

上記の活動報告や反省を踏まえて、以下のような改善点を講じていきたい。

まず、一般学生の参加者数が少なかったという反省に対しては、活動周知の仕方や内容を工夫することが求められると考える。今後は、Instagram や公式 LINE を積極的に活用して呼びかけを行うということや、学内に掲示する掲示物がより一般学生の目に留まるような工夫をするということを実行していきたい。その際、ただ活動の内容や情報を伝えるだけでなく、活動の意義や魅力をしっかりと伝えていきたい。「倉田山清掃」は、大学のボランティアルーム主催であるため非常に気軽に参加できるということ、活動を通して普段は関わらないような学年・学部の人とも関わるということが魅力だと考えているため、この点を一般学生にも伝えられるように工夫していきたい。

また、計画通りに活動を実施することができなかったという反省に対しては、活動実施までにやるべきことや必要な期間を明確にし、その通りに動いているかを企画スタッフ全体で確認し合うということが必要だと考える。そのために、企画リーダーに仕事を任せるのではなく、全員で企画を進めるという意識で仕事の分担を行い、仕事の進捗を共有するために対面での話し合いも実行していきたい。活動当日も、事前に当日の計画をしっかりと立てそ

の通りに動くということを意識し、時間内に終了できるようにスタッフ全体で協力していきたい。

6. まとめ

来年度は、これらの考えをひとつずつ実行に移していくことで、より多くの人に「倉田山清掃」に参加していただけるように努めていきたい。そして、人々が交流を深めながら環境美化に対する意識を高められるように、企画での活動をより有意義なものにしていきたい。

【文責：教育学部教育学科 2年 打田 桂花】

サマースクール 活動報告

1. 目的

サマースクールは、松阪市ボランティアセンターが主催するイベントである。私たちのサマースクール企画班では、その講座のうち1つを松阪市ボランティアセンターの協力のもと企画・実施した。

15回目の開催となる今年度の活動目的は以下の2点である。1点目は、高齢者疑似体験を通して、地域社会の一員として自分には何ができるかを考えるきっかけにしてもらうこと。2点目は、異なる世代、年齢の人々と交流し、自分が今後どのように接していくかを考えるきっかけにもらうことである。

2. 活動内容

例年、参加者に福祉を知ってもらうことを目的に、ピクトグラムや福祉体験ゲームラリー、お菓子作りを行っていたが、今年度は新たな企画を実施した。

今年度の活動は以下の通りである。

講座のテーマ：「おじいちゃん、おばあちゃんになってみよう」

開催日：令和6年8月8日（木）13:30～15:30

場所：松阪市福祉会館

参加者：小学生3名

参加ボランティア：学生スタッフ7名

参加対象：小学3～6年生

活動内容：①自己紹介

②高齢者疑似体験（高齢者疑似体験装具を装着し、階段の昇降、靴下の着脱、軍手で折り紙、ペットボトルのふたの開閉など）

③休憩

④高齢者ボランティア団体との交流（カード遊び、手遊び歌）

⑤終わりのあいさつ、解散

3. 活動報告

今年度のテーマ「おじいちゃん、おばあちゃんになってみよう」は、高齢化社会において高齢者と関わる機会が増えることを踏まえ、参加者に高齢者への理解や接し方を考えてもらうことを目的に設定した。

最初に行った高齢者疑似体験では、参加者一人一人に高齢者疑似体験装具を装着しながら、階段の昇降、靴下の着脱、ペットボトルの開閉など、日常生活での動作をするという

活動を行った。この体験により、高齢者の日々の身体的苦勞やサポート方法を参加者と共に学ぶことができた。

また、高齢者ボランティア団体とのレクリエーションでは、昔の手遊び歌を教えてもらいながら一緒に歌ったり、トランプゲームやカードゲームをしたりと、楽しく活動することができた。初めは緊張していた参加者も、職員や高齢者ボランティアの方々の温かな対応により楽しく明るい雰囲気の中で活動することができた。

《活動の様子》



4. 参加者の声

- ・楽しかった。
- ・階段を上ることや靴下を履くことが難しかった。
- ・おばあちゃんにやさしくしようと思った。
- ・工作やお菓子作りをしてみたい。

5. 反省

今年度は、前年度の参加者へのアンケートを活用し、新たな企画を考えることができた。また、参加者1人につきボランティアスタッフを2人配置したことで、参加者とボランティアスタッフのコミュニケーションが円滑になり、スムーズに進行できたと考える。

一方で、時間配分に課題が残った。高齢者疑似体験活動は、装着の時間も含めると、時間がかかると予想していたが、計画していた時間よりはるかに早く進行してしまった。今後は、進行が早まる可能性も見越して、予備のアクティビティや補足プログラムを準備しておく必要があると感じた。

6. まとめ

今年度は、新たな内容に挑戦したことで、今後の実施内容の幅を広げる良い機会となった。サマースクール講座で新たな企画内容を考えていく過程において、松阪市ボランティアセンターの担当者の方をはじめ、高齢者ボランティア団体の皆様のご協力により、今

年度の企画を実施することができた。この経験を通じて、高齢者との関わり方や配慮の重要性、高齢者や福祉に対する自分の考えを構築する良い機会となった。

今後も、サマースクール企画班として良い企画をつくっていくために、松阪市ボランティアセンターと連携しながら参加者に楽しんでもらえるように努めていきたい。

【文責：教育学部教育学科 2年 坂本 叶】

他大学交流 活動報告

1. 目的

他大学交流とは、1年に2回ほどボランティア活動を提供し、ボランティアを行っている他大学の団体、機関と交流する企画である。今年度は、ボランティア情報や日々の活動内容、団体としての取り組みを情報交換し、互いの団体の運営向上を図ることを目的とした。

2. 活動内容

今年度は、皇學館大学ボランティアルームと異なる仕組みで運営している愛知淑徳大学 CCC の皆さんと交流をした。アイスブレイクを織り交ぜながら、互いのボランティアの参加状況や団体運営の仕組み、ボランティア発信をする際の工夫について情報共有や意見交換をした。

交流団体：愛知淑徳大学 CCC

日 時：3月31日（月） 10:00～12:00

場 所：愛知淑徳大学星ヶ丘キャンパス

参加人数：6人（皇學館大学2人、愛知淑徳大学4人）

内 容：①アイスブレイク（自己紹介、ワードウルフ）
②ボランティア情報や日々の活動内容の情報交換
③愛知淑徳大学星ヶ丘キャンパス CCC の活動部屋の見学
④終わりの挨拶、解散

3. 活動報告

今年度は秋に交流をする予定だったが、愛知淑徳大学 CCC の都合上により延期し、上記の日程で行った。自己紹介やワードウルフなどのアイスブレイクを織り交ぜ楽しく交流した。また、ボランティアや団体についての情報交流については、互いにどのようなボランティアを多く扱っているか、公式 SNS でどのように学生に対してボランティア情報を発信しているのかについて話し合った。そして、愛知淑徳大学 CCC の活動部屋の見学では、壁や掲示板に貼られているボランティア情報の掲示物が写真と約 30 文字の説明が書いてあることや様々な企画団体の概要を詳しく書いてある掲示板があるといった工夫を発見することができた。

《活動の様子》



4. 反省

今年度は、7月下旬から公式 Instagram のダイレクトメッセージを通じて連絡を取り合い、Zoom で内容に関する打ち合わせを行うなど、早い段階から準備を進めることができた。その結果、当日もスムーズに進行し交流会を進めることができたと思う。

一方で反省点として、例年は年に2回実施していた交流会が、他大学との日程の調整が難しく、今年度は一度しか交流会を実施できなかった点が挙げられる。次年度からは、早い段階で交流校を決めて連絡をしたい。

また、新たな交流先を検討することを目指していたが、具体的な交流校の開拓に至らず、交流幅を広げることができなかった。次年度は、これまでに交流実績のない三重県内や県外の交流先を検討していきたい。

5. まとめ

今年度は、愛知淑徳大学 CCC との交流を通して、学生へのわかりやすいボランティア情報の発信や掲示物の作成、貼り方を学ぶことができた。皇學館大学ボランティアルームで新たな情報発信方法を考えることができ、大変有意義な機会となった。今回の交流を実現できたのは、愛知淑徳大学 CCC の学生スタッフや職員の皆様のご協力のおかげであり、心より感謝申し上げる。

今後も、他大学交流企画班として良い企画を作っていくために、班内で話し合いを重ね、他大学の団体の皆様と協力し、意義のある交流会にすることができるように努めていきたい。

【文責：教育学部教育学科 2年 坂本 叶】

倉陵祭企画（模擬店実施）活動報告

1. 目的

本企画の目的は、皇學館大学倉陵祭への「ボランティアルーム」として模擬店出店を通じて、以下の2点を達成することである。

1つ目は、倉陵祭という機会を活用し、「ボランティアルーム」の存在を学内外の来場者に広く周知することである。これにより、今後のボランティア活動への関心や参加希望者の増加が期待できる。

2つ目は、模擬店の活動を通してルームスタッフ同士のチームワークを深めることである。企画・準備から運営、片付けに至るまで、スタッフ全員が協力し、成功をさせる為の取り組みから、互いの連携を深め、チームワークを築くことができ、今後の「ボランティアルーム」の活動の進展につながる。

2. 活動内容

- ・ フランクフルト 1本(基本的にトマトケチャップやマスタードのトッピング付き)を 200円、ペットボトルドリンク 1本(500ml・全12種)を 100円で販売
- ・ 募金企画との連携で「能登半島大雨災害支援金」の募金活動を実施
- ・ アンケート企画との連携し、来場者へのアンケートを実施。

3. 活動報告

- ・ 売上：151,350円
- ・ 支出：111,500円
- ・ 利益：39,850円

今年度は昨年度の反省から模擬店のみの出店となり、模擬店の質を高める為の企画運営（シフト表の作成や役割分担など）や綿密な計画を練ることで、事前準備までの期間を充実させた。その結果、前日には万全の状態に仕上げることが出来た。

当日には、呼び込みや模擬店内の効率的な運営などにより、フランクフルトは完売、ドリンクは少し売れ残りが出てしまったものの、来年度には改善できる課題であると考え。利益も確保でき、昨年度の反省を十分に活かした活動となった。

4. 反省

- ・ ケチャップが初日から足りなくなってしまう、頻繁に買い出しを行う必要があったため、初めからかけるのではなく「パキって」などの使用が望ましいことが分かった。※2日目にはマスタードソースも同様に不足する結果となった。
- ・ ドリンクを全て売り切ることが出来ず、種類の確保だけでなく在庫の数を合わせたりするなどの工夫が必要だと感じた。
- ・ 注文後すぐに提供できない場面があり、急遽番号札を作成した。事前に作成しておくか、

即時提供出来るような運営をするように対策すべきである。

- ・倉陵祭企画のメンバーが仕事を抱えすぎてしまった部分があり、ボランティアスタッフとの協力や連携という面から助け合えるような工夫をしていくべきだと感じた。

5. まとめ

今年度のボランティアルームとしての倉陵祭への模擬店出店は、結果として利益が得られ、二日間の活動を通してボランティアルームスタッフが協力して成し遂げることが出来た。この経験はボランティアルームという団体の周知につなげることが出来たと考える。

しかし、模擬店内で実施したアンケートの回収数が少なかったため、アンケート企画とも連携しながら声かけやアンケート回答への周知の工夫が必要である。

また、来年度も模擬店出店団体として参加することが決定しており、企画運営メンバーを軸としてスタッフ全体で更により成果を目指して取り組んでいきたい。

6. 実際の模擬店の様子



【文責：教育学部教育学科 2年 森田 佳歩】

季刊誌活動報告書

1. 目的

季刊誌には、ボランティアの情報や、参加した感想、ボランティアルームの活動内容などを掲載し、学生用と外部用の2種類を作成している。目的は、季刊誌を読んだ人にボランティアの魅力を伝え、ボランティアルームの認知度向上を図ることである。

学生用の季刊誌には、ボランティア参加者の感想や、現在募集中のボランティア情報などを掲載し、学生にボランティア活動への関心を持ってもらうことを目的としている。そのため、ボランティア内容を中心に構成している。

一方、外部用の季刊誌には、ボランティアルームの概要や活動実績を主に掲載し、ボランティアルームの存在意義や活動内容を広く知ってもらうことを目的としている。主な配布先は、ボランティア受け入れ団体や社会福祉協議会である。

2. 活動内容

季刊誌作成にあたり、4月にミーティングを実施し、年間目標の設定、担当者の決定、作成手順の説明を行った。今年度は、学生用・外部用ともに、夏号と冬号（秋・冬合併号）の2号を発行した。いずれも、情報が読み手に伝わりやすくなるよう、余白を減らし、文字や写真のサイズに配慮したレイアウトを心がけた。

学生用は、昨年度からInstagramへの掲載に移行したため、紙媒体での発行は10部とし、ボランティアルームに設置した。

外部用は、三重県・伊勢市・松阪市・四日市市の各社会福祉協議会の4団体に配布した。

号	発行月
夏号	8月
秋・冬号	1月

3. 活動報告

今年度の季刊誌はすべて2年生が担当した。夏号は予定通りに作成を始めたが、学業（課題・試験）との両立が難しく、発行が1ヶ月遅れた。秋号は作成予定者がスタッフを退任し、代替担当を決めていなかったため、発行には至らなかった。冬号では、新たに「ボランティアに参加したスタッフの声」を掲載し、実際の体験に基づいた声を伝える構成とした。

4. 反省、改善点等

1) 内容面について

昨年度の季刊誌を参考に作成したため、掲載内容に類似点が多くなってしまったことが課題である。学生用冬号で取り入れた「ボランティアに参加したスタッフの声」についても、

学生にその内容が届いているか、またどのような情報を求めているのかが不明なまま作成してしまった。来年度は、学生へのアンケート調査を行い、ニーズに合った季刊誌を作成できるようにしたい。

年間報告会では、外部の方から「大学の地図が小さく見づらい」という意見があった。これを受けて、今後は大学のホームページへのリンクや二次元バーコードの掲載などを検討したい。

2) 作成体制について

今年度は秋号が作成できず、秋・冬号合併号としたものの、発刊が予定より1ヶ月遅れた。来年度は、以下の3点を実施し、スムーズな発行を目指す必要がある。

- ① 作成担当者を企画メンバーが明確に把握すること
- ② 発行の進捗状況を随時確認すること
- ③ 完成した原稿をグループLINEで共有すること

また、作成が難しい場合は、早めに連絡を取る体制が必要である。そのためには、日頃から相談しやすい雰囲気を作り、困ったことがあればすぐに連絡できる関係性を築くことが重要である。

5. まとめ

今年度は、昨年度の反省を踏まえ、季刊誌にボランティア参加者の声を掲載した。しかし、学生がその内容を見てどのように感じたか、どんな内容を知りたいのか把握できなかったことが課題として残った。来年度は、今年度の反省を踏まえて、季刊誌をより良く作成するためにはどうするかメンバー内で話し合い、編集ツールの使い方などを共有できるようなミーティングを行えるようにしたい。

【文責：教育学部教育学科 2年 縣 愛心】

3. アンケート報告

アンケート結果報告

1. 目的

今回は「学生はボランティアルームに何を求めているのか」、「学生に求められるボランティアルームになるためには何をしていくべきかを理解し、今後の活動に活かしていく」の2つを目標にアンケート調査を行った。

2. 活動内容

前年度と同様にアンケートの回答方法はGoogle Formsに統一した。今年度も、回答ページの二次元バーコードをモニターに映し、ペーパーレス化を図った。また、アンケートは比較検討をするために、ボランティアで何が得られると感じているのか、ボランティアに何を求めているのか、ボランティアルームは学生とどのように関わっていくべきなのかなど、ボランティアルームの指針に関する項目は昨年度と統一項目とした。

回答期間：2024年12月11日～2025年1月31日

対象者：文学部	1,134名
教育学部	873名
現代日本社会学部	500名
合計	2,507名(令和7年1月1日時点)

方法：Google Formsでアンケートを作成し、回答ページの二次元バーコードを、事前に許可を得た講義、ゼミにて教室内モニターに掲示し、学生に読み取ってもらう形式で回答をお願いした。

アンケート内容：アンケート項目は以下の10項目とした。

- ①学年・学科
- ②ボランティアルームの認知度
- ③ボランティアルームの活動内容
- ④ボランティア情報の入手方法
- ⑤今年度のボランティア参加率
- ⑥今年度参加してみたいと思うボランティア
- ⑦参加してみたいと思う具体的意見
- ⑧今後参加してみたいボランティアの分野
- ⑨ボランティアに参加することによって、何が得られると思うか
- ⑩ボランティアルームへの意見・要望・改善点

3. 結果報告

文学部1,134名、教育学部873名、現代日本社会学部500名の合計2,507名にアンケートを行った結果、得られた回答数は471件であった。昨年のアンケート結果は487件だったため回答数が減少した。例年回答率の悪かった4年生の回答数が昨年度の7倍だったが、他学年と比

べると回答数は少ない。毎年、4年生の回答率が低い理由は、講義を受けていないことであると考え、次年度以降は4年生の回答数を増やすために講義だけでなくゼミに回答の依頼をしていく。以下、得られた結果を順に示していく。

① - 1 あなたの学年を選んでください。

1年	205人
2年	125人
3年	120人
4年	21人

① - 2 あなたの学科を選んでください。

神道学科	0人
国文学科	16人
国史学科	6人
コミュニケーション学科	1人
教育学科	355人
現代日本社会学科	93人

学年は多い順に「1年」「2年」「3年」となっており、学科では「教育学科」が最も回答が多かった。

今回のアンケートでは二次元バーコードを教室のモニターに映すことで回答への協力依頼を行ったが、講義開始後の5分間で調査を実施したため、時間の制限があり回答できなかった学生もいたと考えられる。

次回のアンケートでは、アンケート回答者を増やすため講義時のアンケート方法以外にもSNSやmanabaを用いた集計方法を検討していく。

② ボランティアルームを知っていますか。

はい	400人
いいえ	71人

③ボランティアルームのLINEまたはSNSを登録していますか。

はい	99人
いいえ	372人

ボランティアルームの認知度とLINE・SNS等の登録の項目では、「ボランティアルームを知っているか」という認知度「はい」が約85%に対し、LINE・SNSの登録「はい」が約20%の結果になった。

今年度はガイダンスや新入生歓迎会でボランティアルームの紹介を行うことができたため、1年生などにもボランティアルームを知ってもらえる機会があったこともあり、約85%の学生が「ボランティアルームを知っている」と回答している。しかし、全員が認知している結果には至らなかった。この値は満足できる数字であるとは言い難く、非認知者10%以下を目標に学生にボランティアルームを認知してもらえるよう、掲示物の更新やSNSでの活動報告、チラシ・パンフレットの作成など、情報の拡散をより積極的に行っていくべきである。

登録については、登録する機会が少ないことと「ボランティアルームを知っている」と回答した学生が多かったにもかかわらず、「登録していない」と答えた学生が多いことが課題である。

登録の機会については、ボランティアルーム内、パンフレット、ボランティアルーム横と6号館に掲示を設けているが、ボランティアに興味がある学生やボランティアルームに来室したことがある学生であっても、自発的な登録機会を逃してしまうとボランティアルームのLINEやSNSを登録しないままになってしまうと考えられる。学生の自発的な登録を待つだけでなく、スタッフが率先してLINEやSNSの登録を呼びかけることが必要である。

「ボランティアに興味がない、あるいは自分には関係がない」と考える学生に対しては、ボランティアに参加することで得られるメリットをボランティア参加者を通じて発信していくことが求められる。加えて、ボランティア参加者に記入してもらっている「ココロの木」を生かしながら、ボランティアに参加した学生の声を届ける活動も必要である。

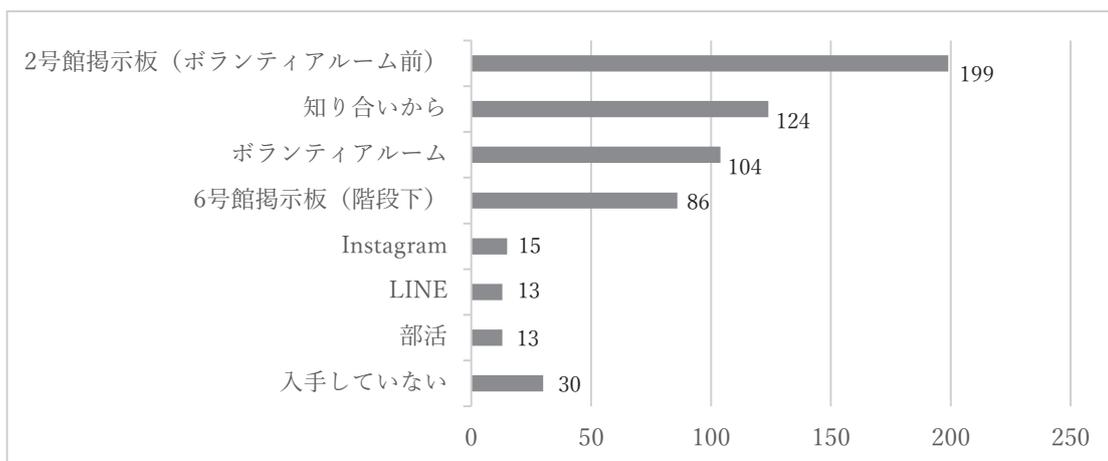
ボランティアへの強制参加に不安を感じている学生に対しては、ボランティアルームの正確な情報を伝えるために説明会を開くなど、ボランティアルームについて学生が知る機会を作るようにしていくべきである。

④ボランティアルームの活動をSNSなどで見たことがありますか。

はい	146人
いいえ	325人

「ボランティアルームの活動をSNSで見たことがある」という学生は約30%であった。ボランティアルームの認知度に対して、SNSの活動を知らない学生が多いことが分かる。このことから、すでにSNSを登録している学生に向けた取り組みだけでなくSNSの広報活動も合わせて行う必要があると考えられる。

⑤ ボランティア情報を普段どこで入手していますか。【複数回答可】



ボランティア情報の入手方法について、複数回答可として選択してもらった結果、ボランティアルーム横の「2号館掲示板」が一番多い回答となった。学内掲示は様々な連絡で使用され、学生も頻繁に活動するため、掲示板を用いたボランティア募集は学生の目に留まりやすいと考えられる。今年度から掲示物作成の効率化や掲示物のインパクト、読みやすさを図るため印刷による掲示に変更した。今後も印刷物の文字の大きさや背景の色など、学生の目に留まりやすく見やすい工夫をしていく必要がある。

次に多かったのは「知り合いから」であった。ボランティアに興味のない学生は友人など周りの人から誘われることがボランティアの情報を得るきっかけになっていることが分かる。

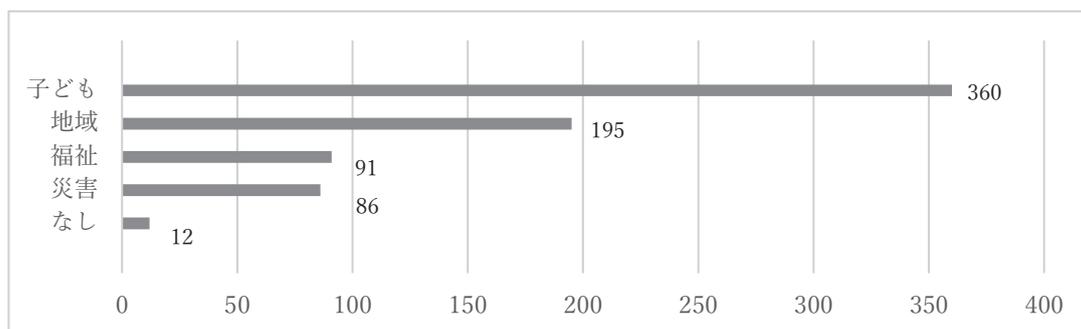
⑥ 今年度ボランティアに参加しましたか。

はい	141人
いいえ	330人

今年度ボランティアに参加した学生は約30%と少なく、あまりボランティアに参加していないことが分かった。

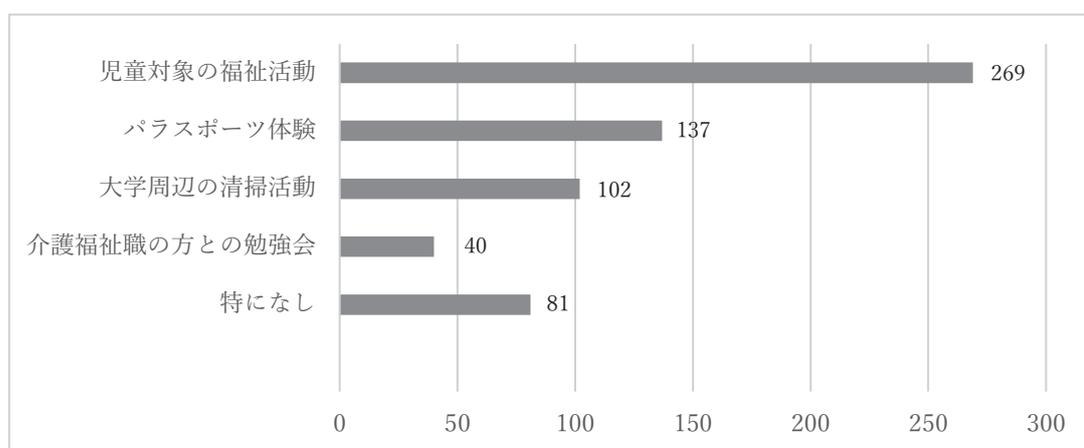
ボランティアに積極的な学生のサポートはもちろんだが、それ以上にボランティアに参加したいと思っている学生を増やすことが今後取り組むべき課題である。

⑦ 今後参加してみたいと思う分野はどれですか。【複数回答可】



今後参加してみたいと思うボランティアの分野について、複数回答可として選択してもらった結果、最も多かった回答が「子ども」に関するボランティアとなり、次に「地域」に関するボランティアが多い結果となった。今回のアンケートでは教育学科の学生が多く回答していたことから「子ども」に関するボランティアに参加してみたい学生が多い結果になったと考えられる。また、「地域」に関しては講義で伊勢などの地域について学ぶ機会が多いことや大学全体で地域と関わりのある取り組みを行っていることから実際にボランティアを通して体験してみたい学生が増えていると考えられる。

⑧ボランティアルームスタッフは様々な活動を行っています。参加してみたいものはありますか。【複数回答可】



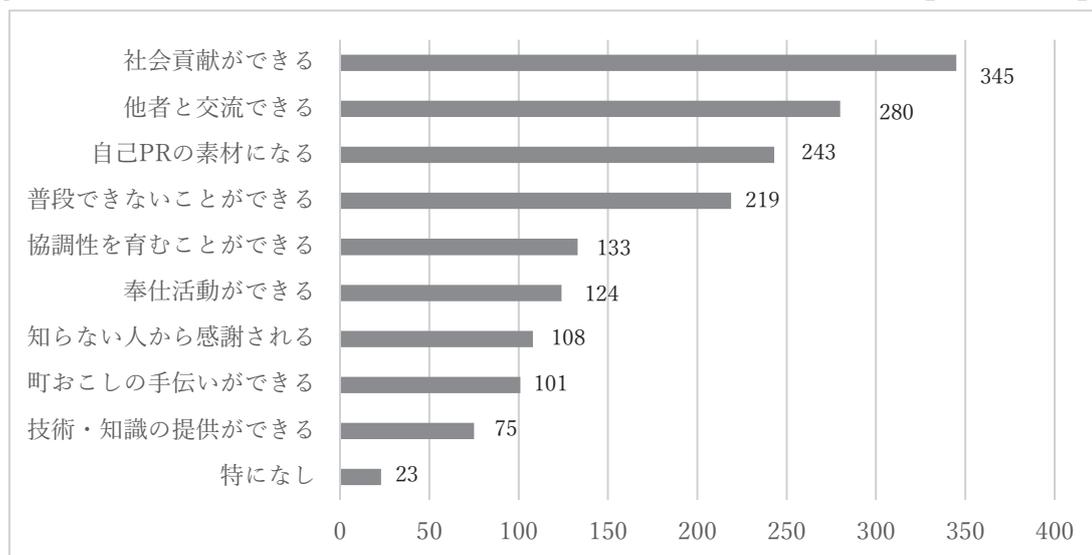
ボランティアルームのスタッフが主体となって行っているボランティア活動について、参加してみたいものを複数回答可で選択してもらった結果、今回最も多かったのが「児童を対象にした福祉活動」である。⑦の項目でも触れたが、教育学科の学生の回答が多かったことから児童対象の活動が多いと考えられる。

その他にも、「パラスポーツ体験」「大学周辺の清掃活動」の回答数が高く、興味を持っている学生が多いことから倉田山清掃の活動、パラスポーツ体験は今後も活動を継続していくべきである。しかし、興味を持っている学生が多い一方で参加人数は伸び悩んでいる。実施日や告知方法を見直し、興味から行動へとつなげることができるように考えていくことが求められる。

また、「介護福祉職の方との勉強会」の回答数が低い原因として、学生にとって専門職との勉強会と聞くと難しく構えてしまうことが考えられる。学生の参加へのハードルを下げ、取り組みが最も必要であり、学生の興味を惹くことを優先した内容を職員と打ち合わせすることの重要性を感じた。

加えて、「特になし」と回答した学生が約15%であった。全体を通して参加学生を増やすことだけでなく、活動に興味を持ってもらうために何を必要とするのかをルームスタッフ全員で考えていかなければならない。

⑨ボランティア活動をする中でどのようなことが得られると考えますか。【複数回答可】



ボランティア活動をすることでどのようなことが得られると考えるかについて、複数回答可として選択してもらった結果、最も多かった回答が「社会貢献ができる」であり、次に「他者と交流できる」であった。ボランティアの定義は「自発的な意思に基づき他者や社会に貢献する行為」を指す。このことから、多くの学生がボランティアの意味や意義を理解していることが分かる。

「他者と交流できる」という回答では、社会貢献になるという意見とは異なり、学生にとってのボランティアの利点であるということが考えられる。今後ボランティアルームでは「誰」と「どのような」交流ができるのかを明確にし、学生に広めていくことが学生のボランティアへのニーズを満たすうえで重要な点になるだろう。

その他にも「自己PRの素材になる」「普段できないことができる」「協調性を育むことができる」といった回答も多く見られた。学生がボランティアに参加することを通して、誰かのために行動するというに加えて知識や経験を得ることができるということも大切だということが分かった。

⑩行ってみたいボランティア活動はありますか。（自由記述）

- ・子どもに関わるボランティア
- ・教育現場でのボランティア
- ・スポーツ大会等イベント運営ボランティア
- ・地域に関するボランティア
- ・ゴミ拾いなどの奉仕活動
- ・災害に関するボランティア
- ・福祉に関するボランティア

学生の中には、将来子どもと関わる職に就きたいと考えている学生が多いことから、子どもと関わるボランティアをしたいという声が多く見られた。現在、ボランティアルームでは学習支援やイベント運営など子どもに関するボランティアを多く扱っているため、学生の

ニーズに応じてボランティアへの参加を促すことができるようにボランティアルーム全体でサポートを行っていく。

⑪ボランティアルームへの意見・要望（自由記述）

- ・1人でボランティアに参加している人の割合が知りたい
- ・伊勢市以外のボランティア活動を充実してほしい

今年度はボランティアへの参加に前向きだが、理由がありボランティアに参加できない、参加しにくいと感じている学生がいることが分かった。「1人でボランティアに参加している人の割合が知りたい」という意見に対しては、2号館・6号館の掲示板等を使いながら1人でボランティアに参加している人の割合を知らせていくことで、1人でボランティアに参加することに不安を感じている学生に周知していく。また、「伊勢市以外のボランティア活動を充実してほしい」という意見に対しては、ボランティアルーム全体がボランティアの依頼を待っているだけでなく各社協の方々と連絡を密にとることで少しでも多くの情報を共有していくことが求められる。

4. 反省・今後の展望

今年度も昨年度と同様にGoogle Formsを利用し、許可を得た講義で二次元バーコードを読み取ってもらい、回答という形でアンケートを実施した。集計方法の反省点としては、二次元バーコードを配布した講義、ゼミがボランティアルームのスタッフが受講しているものであったため回答をお願いした学部・学科が偏ってしまった点である。授業の時間を使わせていただき対面でアンケートを取るには限界があるため、SNSやmanabaを用いたアンケートの呼びかけが重要になってくるだろう。

これらの反省点から来年度は企画メンバー全体で協力し、アンケート方法を検討し、アンケート内容と作成を早め、12月中頃までには配布の許可を受け、誰がどの講義、ゼミで二次元バーコードを配布するのかを明確にしておきたい。

今年度はボランティアの募集依頼も多く、たくさんの学生と関わる機会があった。ボランティアルームが学生に求められていることを再度確認し、今後の活動に生かしていきたい。

【文責：教育学部教育学科 3年 小川 真依】

4. 資料

令和6年度 ボランティアルーム学生スタッフ一覧

No	所属	学年	名前
1	文学部コミュニケーション学科	4	竹内 七菜実
2	文学部コミュニケーション学科	4	久保田 陵
3	文学部コミュニケーション学科	4	田中 優陽
4	教育学部教育学科	4	井坂 安寿
5	教育学部教育学科	4	石井 陽菜
6	教育学部教育学科	4	近藤 朱莉
7	教育学部教育学科	4	中森 七海
8	教育学部教育学科	3	青山 理伊音
9	教育学部教育学科	3	澤村 佳純
10	教育学部教育学科	3	藺部 萌果
11	教育学部教育学科	3	原 一貴
12	教育学部教育学科	3	村井 かのこ
13	教育学部教育学科	3	村上 愛果
14	教育学部教育学科	3	山口 真凜
15	教育学部教育学科	3	吉岡 紗菜
16	現代日本社会学部現代日本社会学科	3	岩野 倅汰

17	現代日本社会学部現代日本社会学科	3	奥田 匠
18	現代日本社会学部現代日本社会学科	3	杉本 理紗
19	現代日本社会学部現代日本社会学科	3	竹内 真穂
20	現代日本社会学部現代日本社会学科	3	野澤 麻衣
21	現代日本社会学部現代日本社会学科	3	山本 大貴
22	教育学部教育学科	2	縣 愛心
23	教育学部教育学科	2	打田桂花
24	教育学部教育学科	2	榎本 萌
25	教育学部教育学科	2	小川 真衣
26	教育学部教育学科	2	坂本 叶
27	教育学部教育学科	2	鹿間 柚花
28	教育学部教育学科	2	松阪 美咲
29	教育学部教育学科	2	森田 佳歩
30	文学部国史学科	1	阿部 温人
31	文学部国史学科	1	鈴木 陽人
32	文学部コミュニケーション学科	1	山本 空未
33	教育学部教育学科	1	田中 月渚
34	教育学部教育学科	1	深田 歩佳

35	現代日本社会学部現代日本社会学科	1	佐藤 崇史
36	現代日本社会学部現代日本社会学科	1	伊藤 隆真
37	現代日本社会学部現代日本社会学科	1	籠井 悠剛
38	現代日本社会学部現代日本社会学科	1	長谷川 匠音